

「ザビエルデータ」から復元する移動ヒストリー

—近世庶民の人口移動研究資料¹—

黒須 里美 (麗澤大学)・高橋 美由紀 (立正大学)・長岡 篤 (麗澤大学経済社会総合研究センター)

キーワード：人別改帳、人口移動、ザビエルデータ、移動履歴、地理的移動

要旨

歴史人口学では、データベース構築とそれを利用した様々な比較研究が進められている。本稿は、福島県の「人別改帳」をベースに構築された「ザビエルデータ」(Xavier data)を用い、原史料である人別改帳から数値データになるまでのステップを整理する。そして、郡山上町と2農村(下守屋村、仁井田村)を対象に、まだ利用されていない人々の「移動」情報(移動理由、期間、移動先・移動元の村)の整理を試み、「移動」がどのような理由や地域間で行われたのかを把握する。さらに、具体的な個人の移動履歴と近隣から遠距離への移動履歴から、地理的な移動分析を試行し、歴史的移動分析の可能性を探る。

1. はじめに

近代センサス以前の人口と家族を研究する「歴史人口学」の分野において、情報技術の進歩と研究資料の蓄積とともに、今、歴史人口学のビックデータとも言えるデータベース構築とそれを利用した比較研究が世界中で進められている²。日本では、「社会を構成する基層は人口と家族である」という認識に立ち、近代化、都市化、国際化によって変容する以前のユーラシア各社会を比較検討する目的を掲げて1995年に始まった「ユーラシアプロ

¹ 本稿は麗澤大学の文部科学省(MEXT)私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「人口・経済・家族の長期的研究：多世代パネルデータベース構築」(H27-31 代表 黒須里美)の一環として人口・家族史研究プロジェクトにおいて整理されている史料とデータを用いている。本稿の準備にあたっては、プロジェクトスタッフの持田敏子さんにご協力いただいた。

² 2016年12月に麗澤大学で開催したIUSSP(国際人口学会)のセミナー“Long-term perspectives on micro-level demographic processes”では、ルント大学(スウェーデン)、ミネソタ大学(アメリカ合衆国)、香港科技大学などを始めとする世界の歴史人口学拠点を代表するメンバーが集まり、現代までを視野に入れた長期マイクロデータを利用した研究の最前線が議論された(<https://iussp.org/en/iussp-seminar-linking-past-present-kashiwa-dec-2016>)。

プロジェクト」(文部省科学研究費創成的基礎研究：代表・速水融³「ユーラシア社会の人口・家族構造比較史研究」1995-1999年度)において、世界的にも価値の高い近世日本の人口史料の組織的収集・整理と一部のデータベース化がはじまった。ユーラシアプロジェクトを機にした国際比較研究はその後20年来続き、研究成果は *Eurasia Population and Family History* シリーズとして米国マサチューセッツ工科大学出版(The MIT Press)から3巻が出版されている⁴。この3巻の中で津谷典子(慶應義塾大学)と黒須里美が利用した日本のデータは、速水融が中心となって収集整理した1716-1870年という長いスパンをカバーする現在の福島県の「人別改帳」をベースに構築された「ザビエルデータ」(Xavier data)である。155年という長期にわたる究極のパネルデータとイベントヒストリー分析という方法によってこれまでにないライフコース分析の研究が可能となった。

本稿では、そのザビエルデータの中でまだ利用されていない「移動」情報に焦点を当て、原史料の人別改帳から数値データになるまでのステップを確認し、質的・量的研究の方法を用いた歴史的移動分析の可能性を探る。ここで扱う「移動」は、奉公などの労働契約を含むものから、結婚、養子縁組、さらにはお伊勢参りなども含めた、18-19世紀に生きた人々の出身町村を越える地理的な動きである。近隣から遠距離を含めた庶民の移動履歴を探ることによって、当時の人々の生活圏、婚姻圏、さらにはそれらが示す社会的ネットワークや文化交流の様相を描き出すことが期待できる。

2. 人別改帳とザビエルデータ

ザビエルデータの原資料は、現在の福島県に残る「人別改帳」である。人別改帳は宗門改帳とともに、日本における前近代の人口・家族の研究で中心的に利用される史料である。宗門改帳は、キリスト教取り締まりのために寛文11年(1671)にその作成が全国的に命じられたとされる(速水 2007)。人別改帳は名前の通り、人口改めであるため、寺に属しているという宗門の情報はないが、それ以外はほぼ同様の情報が掲載されている。史料作成の方法と残存状況には地域差があり、「現住地」と「本籍地」のいずれの情報も示しているか、乳幼児死亡を含めた記録の漏れがどのくらいあるのか、一筆とされる記録の単位が世帯を示しているか、など様々な史料の特徴や制約への注意が必要である。しかし、現在の国勢調査(静態統計)と出生・死亡・移動などの動態統計を合わせたような記録で、地域によっては毎年の記録が残存し、かつ克明な経済指標(持高・牛馬等)も含むことから、その内容の豊富さは歴史人口学の本家である西欧のデータ(教区簿冊などを利用した家族復元)をしのぐ。特に二本松藩(現在の福島県二本松市・本宮市・郡山市を中心とする)は、18世紀における人口減少が激しく、それゆえに非常に詳細で正確な人別改がなされたとされる(成松 1992, 1985)。155年間続く史料は、個人の一生のみならず、世帯に関する最大

³ 麗澤大学名誉教授。2009年に文化勲章を受章。

⁴ <https://mitpress.mit.edu/books/series/eurasian-population-and-family-history>

で8世代までも追うことが可能であり、同じ戸籍型の東アジアの史料と比べても、その詳細度と信頼度は秀でている(Dong 2015)。

速水融が、歴史人口学の史料として、人別改帳や宗門改帳の収集を始めたのは1960年代後半のことである。そのうちの、福島県の史料に関しては、1980年代に成松佐恵子らの強力な研究補助を得、多くの人力と時間をかけた史料の解読と整理、そしてザビエルデータとしての膨大な情報の数値・コード化と入力が進められた。ザビエルデータ(Xavier data)というその名前はもちろん、近世初頭にキリスト教を日本に伝えたイエズス会の宣教師フランシスコ・ザビエルに由来する(“Thank you, Francisco Xavier” Hayami 1979)。その後、速水融は研究拠点を京都の国際日本文化研究センターに移した。ザビエルデータが本格的に利用されるようになったのはユーラシアプロジェクトである。情報科学の専門家であった小野芳彦(現北海道大学)の協力によってDB2を利用したデータベース化がなされ、プロジェクトの国際チーム(Eurasia Project)のGeorge Alter(現ミシガン大学)のアドバイスを得てリレーショナルデータベースによる変数作成がスタートした。これが冒頭に挙げたMITのシリーズ出版に至るまでにはかなりの時間を要した⁵。

こうして研究がスタートし、ザビエルデータを利用した様々な分析が可能になり、特に福島県郡山市周辺の歴史人口学の研究は多くのモノグラフから国際比較研究まで、結婚、家族、ライフコース、そして人口と経済のつながりを探る数多くの成果が上がっている(例:高橋 2005; 平井 2008; Lundh, Kurosu, et al. 2014)。しかし、ザビエルデータはまだ活用し尽くされていない。特に移動に関する研究は数少ない(Tsuya&Kurosu 2004, 高橋 2005)。移動研究のためには、原資料と数値化されたデータの両方を理解することが必要である。以下では、原資料である人別改帳から、それを解読・整理し、コード化し、入力して構築されたデータベースについて、それぞれの段階での移動情報を整理し、新たな研究資料として地理的情報を付与する過程を示す。

3. 人別改帳から読む移動情報

ザビエルデータには二本松藩と会津藩の10町村が含まれているが、本稿ではその中でデータクリーニングが進み研究利用が進行している在郷町郡山(郡山は上町と下町とから成るが、今回使用するデータは上町のみ)と2農村(地図2参照)に焦点を当てる。それらの原資料は以下の通りである。

⁵ Eurasia Project は共通の分析モデルを7地域5ヶ国の18-19世紀人口データに適用し比較分析を行うという画期的な試みで、歴史的・文化的背景を異にする地域の人口・家族・経済情報の比較可能な定義付けと操作化のために、5ヶ国20名程の研究者が取り組んだ。日本では津谷典子の協力を得て、小野芳彦、中里英樹(現甲南大学)、黒須里美によって下守屋村と仁井田村の分析ファイル作成が始まった。その後、ザビエルデータは速水融の麗澤大学退職とともに、麗澤大学に寄贈され、現在は人口・家族史研究プロジェクトによって管理拡充されている。

- 陸奥国安積郡下守屋村人別改帳 (郡山市歴史資料館所蔵 水山家文書)
- 陸奥国安達郡仁井田村人別改帳 (個人所蔵 遠藤家文書)
- 陸奥国安積郡郡山上町人別改帳 (郡山市歴史資料館所蔵 今泉家文書)

まず、原資料である郡山上町人別改帳にどのように移動の記録が書かれているかを以下に示す。図1において最初に登場してくる世帯は現在町に住んでいる。戸主は水呑「武平衛42歳」である。この家は、水呑(持高がない)だが、下女を四人雇っている。最初の「もみ18歳」は、越後国蒲原郡から奉公にきている。つぎに記載されている「いわ15歳」は、仙台城下から奉公に来ている。三人目の「ふし12歳」は、同じ郡山上町の女性である。最後の「とめ19歳」も奉公人である。このように、その世帯に現在居住している構成員と他所から流入してくる構成員が現住人口<内書>であり、郡山上町に流入してくる人物に関して流入元が記載されている。

また、次の世帯は前の世帯よりも若干下に、小さく記載されている。この世帯は、現在は郡山上町には住んでおらず、二本松藩に居住している。史料からはこのように、入ってくる人物と郡山上町に籍はあるが現在居住していない個人や世帯(非現住人口<外書>)に関する情報も記載されている。

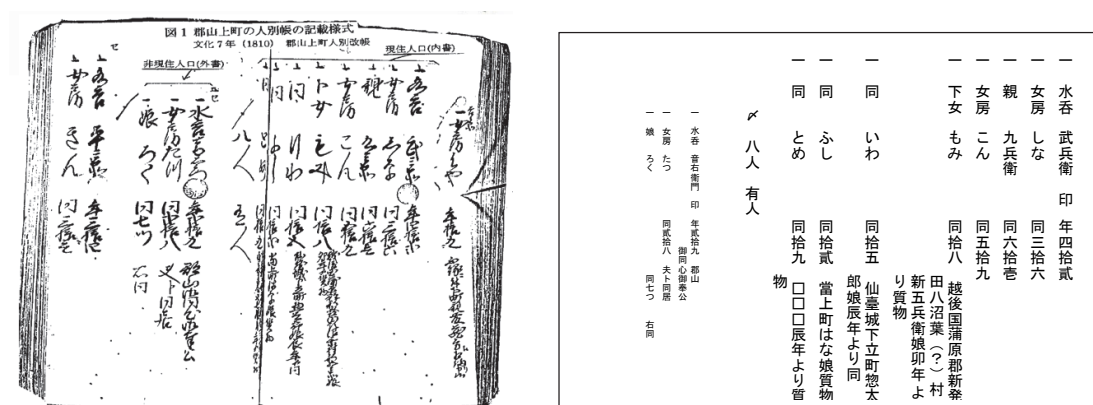


図1 陸奥国安積郡郡山上町人別改帳

4. BDSの移動情報：下守屋村「次郎」の事例から

前節で、人別改帳から世帯と移動情報が把握できることを示したが、人別改帳が毎年作成され、かつそれが残存しており、さらにその個人が他村へ結婚・養子縁組などで籍を移していない場合にはその個人の一生に起こった「移動」をその世帯の状況とともに毎年観察することができる。しかし、そのためには前節で示した人別改帳の毎年の情報を世帯ごとにつなげて整理する必要がある。その整理は速水融が考案した「BDS (Basic Data Sheet)」によって古文書からの解読とともになされた(速水2007)。個人の一生を時刻表のように見

立てて世帯単位で作成されたシートである(図2)。ここでは、ザビエルデータの3町村の中でも移動履歴の多い、下守屋村「次郎」に焦点を当て、史料の豊富な内容を示す。

「次郎」は、1708年(宝永5)(1716年以前、1年のみ残存する史料より)下守屋村の中堅層(持高9石)、五右衛門(父)とみつ(母)の息子として登場した。次郎は、同村の兵三郎宅(持高13石)へ19歳で婿入すると同時に「左右衛門」、その後娘婿をとった36歳時に「六右衛門」と生涯2度改名している。図2では、改名した次郎が「左右衛門」として、兵三郎を筆頭に三世家族の中に26歳から記載されている。図2のBDS左側の年齢記載部分が、いわゆるその年ごとの現住人口であり、右側(非現住人口)には個人ごとに移動履歴が追えるように整理されている。

陸奥国安積郡下守屋村																									家番号 19		
年	名	性別	戸の年格と籍	年齢																					計	持高	項序
				1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21			
享保11年(1726) 丙午	兵三郎	男	主	27	62	75	76	27	22																		16
12 (1727) 丁未	つ	女	主	37	63	76	27	22																			16
13 (1728) 戊申	兵三郎	男	主	60	64	77	28	23	2																		16
14 (1729) 己酉	つ	女	主	61	65	78	27	27																			16
15 (1730) 庚戌	兵三郎	男	主	12	66	79	30	25	4																		16
16 (1731) 辛亥	つ	女	主	63	67		26	5																			16
17 (1732) 壬子	兵三郎	男	主	64	68		27	6																			16
18 (1733) 癸丑	つ	女	主	62	69		28	7																			16
19 (1734) 甲寅	兵三郎	男	主	66	70		30	9	2																		16
20 (1735) 乙卯	つ	女	主	67	71		28	10	3																		16
21 (1736) 丙辰	兵三郎	男	主	68	72		26	11	10	19																	16
元文2 (1737) 丁巳	つ	女	主	69	73		28	11	5	20																	16
3 (1738) 戊午	兵三郎	男	主	70	74		23	12	6	外																	16
4 (1739) 己未	つ	女	主	71	75		29	10	7	外																	16
5 (1740) 庚申	兵三郎	男	主	72	76		30	15	8																		16
6 (1741) 辛酉	つ	女	主	73	77		31	16	9																		16
寛保2 (1742) 壬戌	兵三郎	男	主	74	78		32	17	10																		16
3 (1743) 癸亥	つ	女	主				33	18	11																		16
4 (1744) 甲子	兵三郎	男	主				34	19	12																		16
延享2 (1745) 乙丑	つ	女	主				35	20	13																		16
3 (1746) 丙寅	兵三郎	男	主				36	21	14	21																	16
4 (1747) 丁卯	つ	女	主				37	22	15	22																	16
5 (1748) 戊辰	兵三郎	男	主				38	23	16	10																	16
寛延2 (1749) 己巳	つ	女	主				39	24																			16
3 (1750) 庚午	兵三郎	男	主				40	25																			16

図2 下守屋村「次郎」婿入先のBDS 1726-1750年

次郎の最初の奉公記載のわかる16歳からその後を奉公による移動履歴を中心に追ってみよう。以下に次郎の婿入先世帯の主な状況は()で示し、移動先の町村には下線で示す。

<下守屋村「次郎」の移動履歴>

1716年(正徳6)	16歳	安積郡 <u>川田村</u> 仁右衛門方へ給取奉公
1717年(享保2)	17歳	安積郡 <u>下守屋村</u> 勘兵衛方へ給取奉公
1718年(享保3)	18歳	安積郡 <u>川田村</u> 徳右衛門方へ給取奉公
1719年(享保4)	19歳	安積郡 <u>下守屋村</u> 兵三郎の娘「さつ」の婿となる
1721年(享保6)	21歳	(長女「つや」誕生)
1722年(享保7)	22歳	安達郡 <u>二本松宛</u> 出人ニ罷り出る
1723年(享保8)	23歳	帰村
1724年(享保9)	24歳	(長女「つや」死亡)
1725年(享保10)	25歳	安積郡 <u>大谷村</u> 藤左衛門方へ給取奉公
1726年(享保11)	26歳	安積郡 <u>川田村</u> 太平方へ給取奉公
1727年(享保12)	27歳	帰村
1728年(享保13)	28歳	(次女「かん」誕生)
1730年(享保15)	30歳	(義祖父死亡)
1731年(享保16)	31歳	安達郡 <u>二本松宛</u> 出人御奉公
1732年(享保17)	32歳	安達郡 <u>二本松</u> 安左野村居成出人に被成杉口雪之丞様へ奉公
1733年(享保18)	33歳	帰村 (戸主となる)
1734年(享保19)	34歳	(三女「すて」誕生)
1736年(享保21)	36歳	(次女「かん」婿取、次郎「左右衛門」から「六右衛門」と改名)
1737年(元文2)	37歳	安達郡 <u>二本松宛</u> 出人御奉公
1738年(元文3)	38歳	安達郡 <u>富岡村</u> 儀右衛門方へ質物奉公
1739年(元文4)	39歳	帰村
1740年(元文5)	40歳	(次女「かん」離別、村内に縁付(再婚))
1741年(元文6)	41歳	(義祖父母同年に死亡)
1742年(寛保2)	42歳	安達郡 <u>二本松宛</u> 出人ニ罷り出る
1743年(寛保3)	43歳	帰村
1744年(寛保4)	44歳	(三女すて婿取)
1747年(延享4)	47歳	安達郡 <u>二本松宛</u> 出人ニ罷り出る
1749年(寛政2)	49歳	安達郡 <u>二本松</u> 廣瀬七郎右衛門方へ分抱御奉公
1750年(寛政3)	50歳	安達郡 <u>二本松</u> 天野平右衛門殿へ御奉公
1751年(寛延4)	51歳	安達郡 <u>二本松</u> 廣瀬七郎右衛門様へ御奉公
1752年(宝暦2)	52歳	安達郡 <u>二本松</u> 奥田平内様へ御奉公

1753年(宝暦3)	53歳	帰村 (三女「すて」離別)
1761年(宝暦11)	61歳	安積郡郡山七之丞方へ給取奉公
1762年(宝暦12)	62歳	帰村
1764年(宝暦14)	64歳	安達郡二本松田村越酒之丞様へ質物奉公
1765年(明和2)	65歳	安達郡二本松福本玄松様へ御奉公
1766年(明和3)	66歳	安達郡二本松吉川権左衛門様へ御奉公
1767年(明和4)	67歳	安達郡二本松山田兵太夫様へ御奉公
1768年(明和5)	68歳	帰村

この先 68 歳からの「移動」はない。次郎は 19 歳で婿入りしてからも二本松城下や近隣の村への奉公が続くが、その間に 3 人の娘を設けている。長女は 4 歳で死去、次女は 10 歳で婿を取るが 2 年で離縁し、その後同村内に縁付いた。三女も婿を取るが離縁、その後、次郎 70 歳の時に再び三女すてに同村から婿養子を取った。この婿「甚之丞」は同村の出身で、史料によると、婿入(再婚)とともに 男子とその嫁、実母とともに、次郎の世帯に引っ越してきており、出身世帯は絶家となった。次郎は 1773 年(安永 2)に 73 歳で 55 年間連れ添った妻を亡くした。しかし、上記の通り、次郎もまたその妻も奉公経験が多かったため、夫婦が同世帯で過ごしたのはそのうちの 33 年間のみであった。次郎は 1784 年(天明 4)に 84 歳で死去するが、この世帯はその後、曾孫によって 1841 年(天保 12)まで続いた。

このように BDS を利用した個人の追跡作業は、フィールドワークで聞き取り調査をしているかのように、当時の人々のライフコースを復元することができ、庶民の生き様を知る醍醐味がある⁶。この事例から次郎の奉公経験の多彩さだけでなく、次郎の娘たちの情報からもこの当時に結婚、離婚、婿取が多かったこともわかる(詳細は黒須編 2012)。このように、ひとりひとりの生きざまを復元し積み上げることによって描く徳川庶民のライフコースは、土地に縛られた農民という徳川時代の庶民のイメージを払拭させるとともに、「伝統的」と思われている家族や結婚のあり方を再考させられる。次節では、このような質的・記述的な方法からさらに情報処理を利用したデータ構築による量的なアプローチに迫る。

5. ザビエルデータ移動情報の試験的アプローチ

ザビエルデータの内、郡山上町と 2 農村の移動情報の概要は以下の通りである(表 1)。

⁶ 現在、麗澤大学図書館 4 階の人口・家族市研究プロジェクト室では BDS 約 310 ファイルボックス(約 1,500 町村)を所蔵しており、MEXT 研究基盤形成支援事業の一環で順次その PDF 化を図っている。

表1 郡山上町と2農村の集計結果

町村名	期間(年)(欠年)	計(人年)	移動数(イベント数)	移動先・移動元の村数
下守屋村	1716-1869 (9)	48,755	3,552	124
仁井田村	1720-1870 (4)	67,130	6,209	203
郡山上町	1729-1870 (18)	194,878	25,269	1,176

ここで、「欠年」とは何らかの事情で人別改帳が残存していない年を示す。「人年」とは分析単位で、一人1年の情報を1人年と数える。例えば先に挙げた次郎の長女は1721年に生まれ1724年に死亡したため、4人年となる。このように町村に登場したすべてのリスク人口（分母）が把握できるので、移動情報（分子）を合わせることによって、移動率を算出することができる。さらにそれを各町村内から外への移動（流出）か、外から内への移動（流入）か確認すれば人口流出・流入率を各年で確認することができ、地理的移動の変化を追うことができる。表2は、移動イベントの全体を2期に分け、各町村別・移動理由別に示した。

表2 郡山上町と2農村の移動理由別移動数(イベント数)

	移動理由	期間(年)		計	
		1716-1799	1800-1870		
下守屋村	結婚養子_流入	329	252	581	3,552
	結婚養子_流出	239	144	383	
	奉公_流入	770	192	962	
	奉公_流出	846	202	1,048	
	その他_流入	167	89	256	
	その他_流出	177	145	322	
仁井田村	結婚養子_流入	504	430	934	6,209
	結婚養子_流出	403	358	761	
	奉公_流入	1,320	338	1,658	
	奉公_流出	1,475	349	1,824	
	その他_流入	409	128	537	
	その他_流出	342	153	495	
郡山上町	結婚養子_流入	1,317	1,925	3,242	25,269
	結婚養子_流出	724	1,400	2,124	
	奉公_流入	3,971	1,990	5,961	
	奉公_流出	3,808	1,833	5,641	
	その他_流入	1,995	2,465	4,460	
	その他_流出	1,506	2,335	3,841	
計		20,302	14,728	35,030	

例えば、このデータから、安積郡にある下守屋村と郡山上町間の移動は 81 件把握できる。そのうちの 1 件を例にとり、BDS に戻って詳細を確認した。まず、下守屋村の史料には、1856 年（安政 3）に郡山上町から「善蔵娘呼取」として下守屋村に嫁入した母「つよ」と、それに連れられて 2 歳で引き取られた「つね」という女子が登場する。母は再婚後 2 年目にして亡くなり、つねは継父「政吉」の元で 5 年を過ごした。しかし、7 歳の時に「郡山宿上町善蔵より養女に呼とり候所離別立帰」とあって再び郡山上町に戻ったことがわかる。

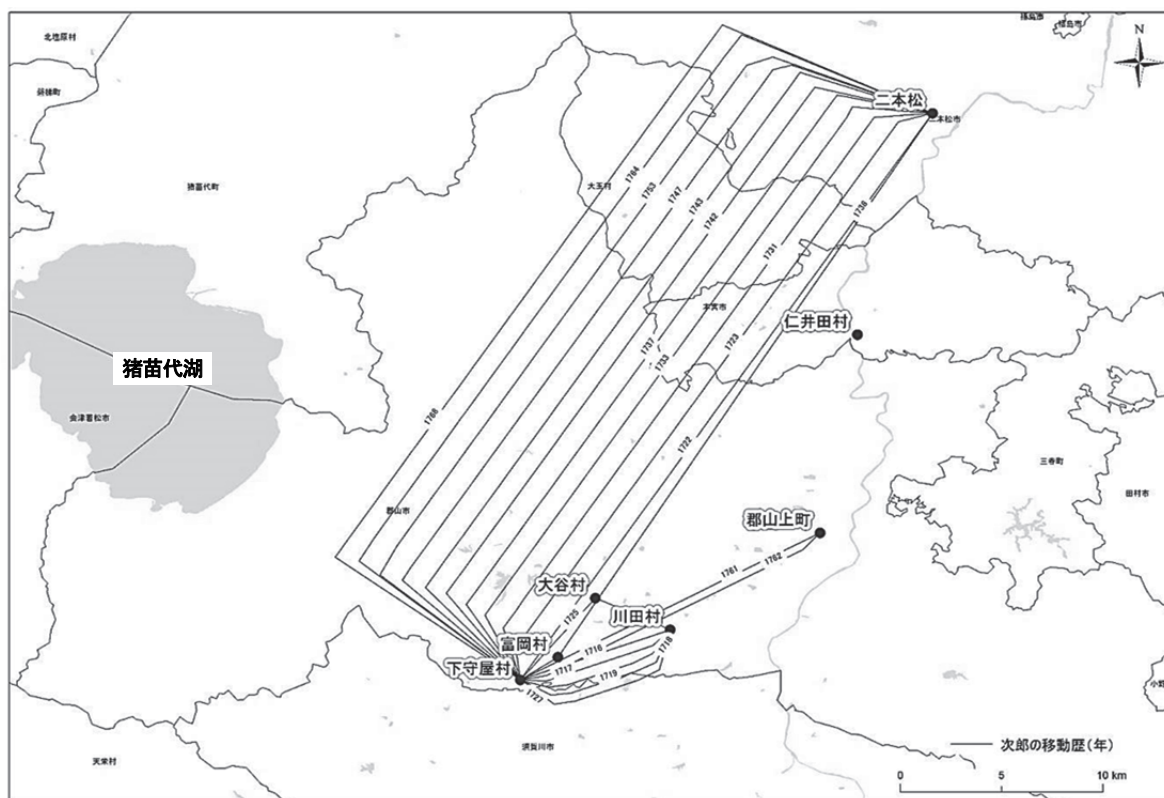
一方、郡山上町の方の史料を見ると、確かに、善蔵の娘「つよ」は 1838 年（天保 9）に生まれ、その後 1853 年（嘉永 6）に郡山下町に縁付いている。しかしその後離縁され、源七宅の嫁として下守屋村に行ったという記載がある。源七はつよが嫁になる政吉の父である。さらにつねは 1861 年（万延 2）に 7 歳で再び郡山上町の祖父善蔵がいた世帯に「厄介」として引き取られるが、その年には「下守屋村政吉方より不縁立帰」として登場している。このように、母娘共に、その移動の詳細が、出身元と嫁ぎ先の二つの違った町村の史料で確認することができた。一例ではあるが、近代センサス成立以前にここまでの整合性が町村の境界を超えて確認できたことは、ザビエルデータの、また原資料である人別改帳の信頼度を示しているといえよう。

一事例からザビエルデータの整合性を確認したところで、いよいよ地理的移動分析の試行的アプローチである。移動情報の中でも地理情報（出身・出先の町村）については、これまで全く利用されていない。なぜならば、コードブックが 30 年以上も前に作成され、紙媒体で更新され続けてきたからである。地理的分析のためには、地理情報コードブックの見直しと、そのコードを数値化されたデータと BDS（またはオリジナル史料）の両者を駆使して検証するという根気のいる作業を必要とした⁷。

その作業を経てリストアップされたザビエルデータの移動先・移動元の地名を元に、各町村の代表点の緯度・経度を比定した。比定方法は、現在も残っている地名は、国土地理院の地理院地図上で緯度・経度を採取し、現在は失われている地名は、歴史地図（主として旧 5 万分の 1 地形図、迅速図、城下絵図等）を参照し、地形的に同定できるポイントを比定し、地理院地図上で緯度経度を取得した。いずれも、集落の中心部の緯度・経度を取得した。

現在、この作業はまだ進行中であり、全体像の地図化は今後の作業となる。ここでは、人の移動を視覚的に捉えるという分析として、二つの事例を示そう。一つは地図を作成し、移動距離からその特徴を探るという方法である。郡山上町と 2 農村からは近隣だけでなく、遠方への移動がある。その事例として地図 1 では近畿地方への移動を取り上げた。これら

⁷ この煩雑な作業は人口・家族史研究プロジェクト室のスタッフの持田敏子さんと高橋純子さんの協力を得て進めることができた。また、その後の移動先・移動元の町村の緯度・経度については地域・研究アシスト事務所に委託し策定していただいた。



地図2 「次郎」の移動履歴と郡山上町と下守屋村、仁井田村の位置関係（行政区域は国土数値情報の2016年データを使用）

6. おわりに

今後、更新中の緯度経度策定を完成させたのちに、実証的な移動分析を試みる予定である。事例として扱った「次郎」の場合、一生のうちに個人としては多い（帰村を含め）30回の移動履歴があるが、このような個人の移動を積み上げたところの、3万5千件を超える移動情報の地図化ができれば、これまで描かれたことのない、近世庶民の移動パターンとともに、様々な結婚圏や労働圏を含めたネットワークが見えてくるだろう。郡山上町、2農村ともに、広範囲からの人口流入はあるが、そこには徳川後期に人口減少が止まらなかった農村と人口増加が続いた在郷町との違いも見えてくるはずである。地図化とともに人がなぜ移動するのか、どこへ（どこから）移動するのか（してくるのか）、その地形的条件、組・藩などの行政単位、政策的な影響など多面的な要因も探っていく。

近代センサス以前の移動情報は、世界で構築されている歴史人口学データとしても稀有である。今後、これらの地理的情報とこれまで Eurasia Project で蓄積してきた長期マイクロデータ分析の方法を統合することにより、時間軸と空間軸を合わせた人口・家族行動や、移動がもたらす都市形成や文化圏のつながりを含めた新しい研究アプローチを提示することができるだろう。

参考文献

- Dong, Hao, Cameron Campbell, Satomi Kurosu, Wen-Shan Yang and Jame Z. Lee. 2015. "New Sources for Comparative Social Science: Historical Population Panel Data from East Asia." *Demography* 52(3):1061-88.
- Hayami, Akira 1979 "Thank You Francisco Xavier: An Essay in the Use of Micro-Data for Historical Demography of Tokugawa Japan." *Keio Economic Studies* 16 (1-2): 65-81.
- 速水融 2007 『歴史人口学の世界』岩波書店
- 平井晶子 2008 『日本の家族とライフコース—「家」生成の歴史社会学』ミネルヴァ書房
- 黒須里美（編）2012 『歴史人口学からみた結婚・離婚・再婚』麗澤大学出版会
- Lundh, Christer, Satomi Kurosu, et al. 2014. *Similarity in Difference: Marriage in Europe and Asia 1700-1900*. The MIT Press.
- 成松佐恵子1992 『江戸時代の東北農村—二本松藩仁井田村』同文館出版
- 成松佐恵子1985 『近世東北農村の人びと—奥州安積郡下守屋村』ミネルヴァ書房
- Tsuya, Noriko O. and Satomi Kurosu 2013. "Social Class and Migration in Two Northeastern Villages 1716-1870." *The History of the Family*: 18(3): 1-22.
- 高橋美由紀 2005 『在郷町の歴史人口学—近世における地域と地方都市の発展』MINERVA
人文・社会科学叢書